

神様と地球のソシテ

登場人物…シメス（幼い神様の名前）

ツキ シメスの友達の星 本編において故人

地球 または 岩だらけの星 中盤でシメスと親友になる

大人の神様 死の理由を答えられない神様たち

ソシエル 神さまに仕える天使

宇宙で
誰かが
待っているよ

なんで
死ぬのだろう。

シメス「ねえ 起きてよ」

彼はシメス。小さな 神様です。

そして、シメスの隣で ジツとして動かない お星様は シメスの 友達です。

シメス「起きてったら」

シメスは 何度も 友達を 起こそうとしますが、友達は ピクリとも 動きません。

シメスは とても 不思議だから「何で？」と 大人に聞いてみました。

そしたら 大人は 動かなくなってしまったことを「死んだ」と 教えてくれました。

でも どうして死ぬのか それは 教えてくれませんでした。

シメス「きつと 大人は 知らないだけなんだ だから死ぬのを 治せないんだ」

大人は 色んなことを 知っているし 色んなことが 出来るのに 死んだことを 治せないのは 何だか おかしい。

そう思った シメスは 大人が できないなら 僕が 友達を 生き返らせてやると 心に 決めました。

シメス(だって、大事な 友達が 動かないままなんて それで お別れ だなんて 僕は とても悲しいもん)

そして シメスは 友達の お星様を 抱いて 大人に 内緒で 広い宇宙へと 旅立ちました。

シメス「こんなに広い 宇宙だったら どこかに 友達を 生き返らせる 方法が きつと あるよね」

どこかに！ どこかに どこかに……

いっぱい 色んな 銀河を 旅するシメス。しかし どこを 探しても 友達を 生き返らせる 方法は 見当たりません。

お菓子の星にも イルカの星にも 遊園地の星にも 行ってみましたが、生き返らせる方法は 見つかりません。

疲れた シメスは 少しの間 横に なりました。

シメス「ねえ、聞いてるかい」

友達に 声を かける シメス。しかし 聞こえる はずも ありません。死んでいるのですから。

シメス「生き返ることが 簡単に できるように なったらさ。どうなるんだろうね。だれも 悲しまなく なるのかな。楽しいまま なのかな……」

シメスは 広い 宇宙を 眺めながら 言いました。

シメス「でも 僕はね 悲しいときも 必要だと 思うんだ。だって楽しい気持ちよりも 悲しい 気持ちのほうがね 君を 大切に したいと思ったから」

死んだ友達からの返事なんて くるはずもない。それが分かっているけど シメスは友達に話しかけます。そして 一人は辛いものです。一人ぼっちで 叶うはずもない願いを 口にする時は とくにそうです。だから 余計 涙が溢れてきます。

シメス「それに楽しい気持ちと 悲しい気持ちの 両方がないと 友達を大切にできないと思うんだ 違うかな そろそろ起きてほしいな 寝ているだけだと言ってくれよ」

ひとしきり泣いたあと シメスはすつくと立ちあがりました。

そして、シメスは 旅を 続けます。

何年も 何十年も 何百年も 何千年も 何万年も

果てしなく 広い 宇宙の中で 友達を 大切にしながら 思いながら ずっと シメスは 旅をします。

そして 随分と 遠くに 来てしまいました。

シメス「ここはどこだろう……あれは？」

シメスが 見ている 先に 大きな 明かりが 見えました。

シメス「ここは とても 暖かいね」

宇宙は とても 冷たいのです。しかしこの 場所は 暖かく、過ごしやすいので、シメスは しばらく 辺りを 散歩することに しました。

シメス「おや??」

散歩していると 岩だらけの星を 発見するシメス。シメスは その 岩だらけの星に 近づきます。すると。

岩星「それは なに？」

岩だらけの 星が 話しかけてきました。

シメス「親友だよ。ツキっていう名前だね。今は 寝ているんだ」

死んでない。寝ているだけさ。シメスは そう思い込むように しました。だって そうしないと ずっと 悲しいままだから。

岩星「へえー、きれいな 星だな。起きたら 私も 友達に なれるかな」

シメス「起きたらね。そうだ。君は ここで 何をしていたの？」

岩だらけの星は、太陽を見つめながら言います。

岩星「宇宙で誰かが待っていると思って このへんをぐるぐる回っていたのさ」

シメス「！」

シメスは その言葉を聞いてハッとしました。

岩星「偶然の出会いってあるのかなと思って ん？ どうしたんだい？ どこか痛むのかい？」

シメスは 岩だらけの星の 言葉を聞いて 昔、ツキが 言っていた 言葉を 思い出して 心が ギュっとなって 悲しくなっていました。

シメスは 涙を 浮かべながら そして 笑顔で 言いました。

シメス「昔 ツキが 言っていたんだ。『宇宙で、誰かが 待っているよ』って」

シメスが ツキを 生き返らせる 旅に 出なければ 岩だらけの 星とも 出会えなかったし、ツキの 言葉を 思い出すことも なかった。シメスは 心の底から 旅に出て 良かったと 思いました。

シメス「僕の 友達の 言う通りだった。本当に 誰かが 待っていた」

ツキが死んだとき、もう永遠に 会えないとばかり 思っていた シメスでしたが そうではありませんでした。

心の中に ツキは いたのです。

岩星「そうか。なら 君さえ よかったら 私と 友達になってくれないか？ こ
こはまだ 誰も いなくてね。とても 悲しい 気持ちだったんだ」

シメス「ああ、もちろん。僕の名前はシメス」

地球「私は 地球」

シメス「よろしく！」

シメスと 地球は すぐに 仲良くなりました。二人は どんなことを するの
も 一緒。

そして やがて 二人は 親友に なっていきます。

シメスは まるで 死んだ 友達の 代わりが出来たように 思いました。

ですが シメスは 楽しい時間を過ごす中で、本当にこのままで 良いのかなと
思い始めるようにも なりました。

シメスは、また 旅に 出たほうが いいのかもしれないと 考え始めます。

シメスは既に ツキを 生き返らせる 方法なんて 宇宙の どこにも ないこ
とを 分かっていました。

だから このまま 楽しいままでも良いのかな 今が楽しければ それで良いの
かな 悲しい気持ちは十分 味わったし もう 楽しむだけの生き方でも 良いよ
ね。と、シメスの 心は 大人の神様のような 心に近づいていきます。

しかし、そこでシメスは 親友の地球を見て あることを思いました。

シメス「でも じゃあ 僕は どうなるのだろう」

シメスは 神様です。神様の 命は 永遠です。だから 星の 友達を 作って
も いずれ 友達は 寿命が尽きて 死んでしまうのです。

神様はずっと別れを経験する生き物なのです。

シメス「こんな永遠の命なんて……僕はいらない」

シメスは 今度は 自分とは 神様とは 何なのかを探す旅に 出ようと決心し
ます。

そして、シメスは 親友の 地球に 自分の気持ちを伝えます。

この頃になると 子供だったシメスも大きくなり 大人に近い身体に 成長して
いました。

シメス「なあ、地球」

地球「なんだい シメス」

二人は お互いの顔は 合わせず 太陽を 見つめたまま。

シメス「……」

地球「見てみるよ、シメス 今日銀河は やけに綺麗だぞ」

シメス「なあ、ちょっと 探し物を してきてもいいか？」

地球は 少し間を空けて 答えます。

地球「何を 探しに 行くんだ？」

シメス「再会さ」

地球「再会？ もう一度 出会うって誰に？」

シメス「それを 探しに 行く」

シメスは 目を星のように 輝かせながら 言いました。

地球「なぜ そこまでして 旅に 出ようとする？」

シメス「永遠の 命を捨てて 力いっぱい 生きてみたく なったんだ」

地球「もったいない。それじゃあシメス。君はこの ツキのようになってもいいと
いうのか？ 知っているんだぞ ツキは 寝ているんじゃない 死んでいるんだ」

シメス「そうか。ツキが死んでいること やっぱり 知っていたんだね」

地球「シメスが ツキを見ているときの 目は 悲しみでいっぱい、とても 死
んだなんて 言えなかったからね」

シメス「やっぱり優しい 星なんだな 君は」

シメスと 地球は 見つめ合った。そして 地球が 言った。

地球「もし 行くというなら ツキを置いていってもらえないだろうか」

シメス「私の 友達を 君という 友達に？」

地球「寂しい時に この美しいツキを 見つめて シメスを 思い出したいんだ

だ

シメスは 忘れないように ツキをジッとみつめ、そして 地球に ツキを預けました。

シメス「ツキを よろしく頼む」

地球に 預けられたツキは 静かに 地球の 中心を 回り始めました。

地球が ツキにみとれていると シメスは そっと、別れを告げます。

シメス「再会を 見つけたら 戻ってくる」

そう言って シメスは 旅立ちました。

地球「約束だぞ」

そして、地球は シメスの 帰りを 待ち続けました

地球に 隕石が 降り注ぐ 天気の良い日も 太陽の 炎が当たる 暑い日も 静かに 静かに 地球は 待ち続けます。

そして 長い時間が 流れました

とうとう 地球は 悲しくなって 泣いてしまいます。

やがて それは 海になり 地球は青い 星に 変わっていきました。

そして さらに 長い時間が 流れます。

シメスは ぼろぼろの 身体で 宇宙を 漂っていました。

そこに 大人の 神様に シメスを探すよう 命令を 受けていた ソシエルという 天使がやってきました。

ソシエル「帰りますよ シメス様」

ソシエルは シメスを 連れて帰ろうとしましたが、シメスの ボロボロの 身体を見て それが 無理だと すぐにわかりました。

ソシエル「シメス様 その身体は」

シメスは 神様が持つ 永遠の 命を 捨てていたので。そして シメスの 命も あと少ししか 残っていません。

ソシエルは 不思議に 思いました。

もうすぐ 死ぬのに シメスは とても 安らかな 顔をしているのですから。この旅でどのようなことを経験したか、それはシメスにしか分かりません。ただ、分かることは シメスが 力いっぱい生きてということだけ。

ソシエル「何故 永遠の 命を捨てたのですかっ」

シメス「僕の 親友の ツキの 気持ちを 知りたかったんだ」

シメスは宇宙に きらめく 星々を 見つめながら 地球との 楽しかったひと時を 思い出しています。

ソシエル「私には 分かりません」

シメス「僕にも 分からなかった。でも 旅をして 分かるようになった」

ソシエルは 誰かが 死ぬところを 見たことは なかった。だからソシエルは子供のときの シメスと同じ 悲しい気持ちになりました。

『なんで死ぬのだろう』と。

そこで、ソシエルはシメスの 死ぬ 理由を知りたいと 思いました。

ソシエル「どうして 死ぬのか 教えてください 知りたいのです」

そして、シメスは 地球のいる 方向に 指をさして 言いました。

「ぼくが 死んだことを 親友に 伝えてくれないか 答えは そこにある。親友の 特徴は 行けば すぐにわかるよ 地球は とても 優しい 奴なんだ」

そう 言い残して シメスは 死にました。

ソシエル「意味が分からない……何故」

ソシエルは 悲しむ 暇もなく 地球に シメスが 死んだことを 伝えにいきます。

ソシエルは 長い旅の果てに ようやく 太陽まで 辿り着き どの星が シメスの 親友だったのだろうと あたりを 見まわします。

ソシエル「あの 青く 美しい 星が そうかも。あの 星は とても 優しそうだし シメス様の 親友の ツキも 回っている」

ソシエルは 地球に 近づきました。

地球「君は？」

ソシエル「天使の ソシエルです。シメス様から 伝言が あります」
ソシエルは シメスが 死んだことを 伝えました。
しかし 地球は シメスが 死んだことを 信じませんでした。

地球「ぜったいにシメスはかえってくる」

ソシエル「死んだのですよっ 帰ってこないんです」

地球「再会を 探しに行ったんだ。きつと 戻ってくる」

地球は 静かに シメスの帰りを 待ち続けました。ソシエルも 地球が かわいそうになったので 一緒に 待ち続けます。

そして……。

地球「帰ってきた……!」

ぼつりと 地球が 言いました。

宝石のように 輝く 隕石が 地球に 向けて 接近してきます。
まるで 天の川銀河のようです。

ソシエル「これは……シメスさまの」

その 隕石は シメスの 身体の一部だったのです。

ようやく シメスは 再会 という 約束を 果たしたのです。

『再会を 見つけたら 戻ってくる』

いま、地球の 心の中は シメスの 思い出で いっぱいです。

地球「遅かったね。ずっと 待っていたんだよ」

輝く 隕石が 地球に どんどん 降り注いでいきます。

地球「宇宙は 熱いし 寒いし 大変だったろう。今は 僕の中は 暖かいんだ。君を きつと 癒してくれるよ。色々 旅の話も 聞きたいな。私も たくさん 色々あったんだよ。たくさん 色々あったんだ。ああ シメスの いう 再会が、こんなにも美しいものだとは」

そして 地球と神様は 一つになりました。

地球は シメスと 再会 できたことに 満足し、後のことは 地球の中の た
くさんの 命に任せ、地球は 永遠の 眠りに つこうとしました。

ソシエル「待って！」

ソシエルは 声を 荒げながら 何故、眠りにつくのか 地球に 聞きました。

地球は 言いました。

地球「答えは 私たちの 中にある。地球で 誰かが ソシエルを 待っているよ
」

地球で 誰かが 待っているよ。

そういつて 地球は ソシエルに 笑顔を 見せて 眠りに つきました。

こうして シメスの 冒険は 終わりました。そして 今度は ソシエルの ば
んです。

ソシエルは 迷うことなく 地球へ 降りていきます。

地球を 回る ツキも 三日月になったり 満月に なったり 生きているかの
ように 姿を変え 地球に降りた ソシエルを そして 地球に住む 生き物を
優しく 見守りました。

これは 神様と 地球と ツキの、出会い、別れ、そして 再会の 物語。

そして、この 美しい 地球に 住む あなたの 物語も 始まるうとしていま
す。

出会いと 別れと 再会が。

終わり

